

**Kanagawa
Library
Association**

巻頭言 鎌倉市図書館電子書籍プロジェクト報告	1
特集：電子図書館への対応	
Σ S t a r を運用してみよう	2
電子書籍を使ってみよう	3
研修会レポート①「指定管理者制度のもとでの図書館運営」	4
②「東京工業大学附属図書館大岡山本館見学」	

鎌倉市図書館電子書籍プロジェクト報告

鎌倉市中央図書館 佐藤 敦子

鎌倉市図書館では平成22年12月から平成23年3月にかけて電子図書館の実証実験に協力参加しました。

この実験は図書館デジタルコンテンツ流通促進プロジェクト(総務省平成22年度新ICT利活用サービス創出支援事業)の一環として「地域で展開するクラウド型電子図書館サービス」の実現可能性を探る目的で行ったものです。

具体的な内容は、①図書館と市内カフェに設置したパソコンからの電子図書館利用②公募モニターによるWEB経由での電子図書館利用③通常の電子書籍のほか市・図書館・地元出版社が所蔵・刊行した資料の電子化と公開です。公開コンテンツは1,051タイトル、うち鎌倉市提供が173タイトルでした。

利用状況は、館内利用は1日8名程度、モニター登録者は1,255名、閲覧回数は15,667回でした。モニターアンケートでは約6割が今後も利用したいと回答した一方、コンテンツ不足やシステムの操作性(タブレット端末で利用できない、コンテンツによって操作が異なりわかりにくい等)に対

しては改善を望む声が多くありました。地域資料については電子図書館との親和性が高く、充実を望むジャンルとして一定の評価がありました。

実はこの実験への参加は主体的なものではなく、「鎌倉で実験しませんか?」という呼びかけに応じたことから始まったものです。当初は、①市民へ電子図書館の体験機会を提供②図書館資料の電子化への第一歩といったメリットを想定していましたが、実際始めてみると③メディアが取り上げてくれることでのPR効果④電子図書館についての最新情報が集まるなどの効果もありました。ただ、国の支援事業のため年度内に結果を出す必要があり、コンテンツの収集・電子化にかけられる時間が短かったことが心残りです。

実験終了後、電子図書館システムの予算化を試みたものの実現には至りませんでした。今後は電子化した地域資料の公開に向けて検討を進めつつ、動向を注視したいと思います。

【結果報告書等】

<http://www.unisys.co.jp/unicity/report1.html>

ΣStar (シグマスター) は慶應義塾大学理工学メディアセンターが運用する学術情報リポジトリである。同大学理工学部および同理工学研究科で生まれた研究成果や学習資料のうち、電子化されているものについて蓄積・保存し、大学内外へ公開している。現在の主要なコンテンツは学位論文(博士・修士)であり、この他、退官記念講演の映像資料や、ローカルに行われ散逸してしまわれがちな研究会・ワークショップの予稿集などの資料について、収集・公開の仕組みを探っている。

慶應義塾大学には大学全体で運用する KOARA という学術情報リポジトリが存在する。同じ大学に別のリポジトリが存在するのは歴史的理由によるが、おおまかな区分としてはリポジトリに載せるべき資料の新しい可能性を探るのが ΣStar であり、安定的な収集・公開の仕組みが確立している資料は KOARA で扱う、というように考えている。収集・公開の仕組みの業務ルーティン化と同時に当該資料が KOARA に吸収されるのが理想であろうが、統合については模索段階である。また、理工系と文系の資料はおのずと性格が異なり、同時に検索できることの利便性のメリット・デメリットについては議論の余地がある。

以降は、リポジトリを運用してきた経験を踏まえた課題を述べる。はじめに資料収集の難しさである。これまでも何度も議論されていることであろうが、理工系の資料についてはさらに難しいように感じる。理工系の論文資料には「旬」がある。研究者は一刻を争い論文発表を行い、研究の参考文献に最新のものを求める。別の側面として、論文に正規の認可を求めて、分野ごとの権威ある学術誌に価値を認める。一昔前の都市伝説では、飛行機で自らの手で nature 誌本部に持ち込んだというのがある。今も手段は異なろうが、同じ意志は働いているだろう。

そのような状況では既刊論文の単純な収集・公開では魅力が少なく、リポジトリへの論文登録の動機付けが足りない。何らかの付加価値が必要であるが、研究室の時系列での研究の流れを追うような仕組みはどうだろうかと考えている。これには、知的財産保護の面で難しいところもあるので、研究者との協力関係が必要である。

論文資料には拘らず、理工系の研究で生み出される成果のうち、時間軸で過去のものが重要であったり、継続的に蓄積されてこそ価値があるものを探る必要があると考えている。たとえば、定点観測やベンチマーク的なデータ、写真・映像デー

タがリポジトリで簡単に公開できたらどうだろうかと考えている。

次に、電子アーカイブの持続性の課題がますます重要になっているように思う。リポジトリを含めた電子アーカイブは、ソフトウェアとハードウェア両面で様々な最新の技術によって成り立っている。最新性の裏返しで、それぞれの技術はバージョンアップを繰り返し、ときには全く新しい技術で置きかえられる。そのため、いま使えるアプリケーションが一年後も使えるという予測は立っても、五年後では全く怪しいという状況になっている。

アーカイブというとデータ自体の保存が主要課題であるが、電子という修飾子が付くことによって、データの閲覧環境の保存にも同じくらいの重みを置かなければならなくなっている。何故なら、閲覧のアプリケーションなしには、電子データファイルを読むことはおろか、中身を開いて内容を類推することさえ難しいからである。電子情報を扱う人員と予算の維持も重要な課題である。最新技術の知識を維持することは大変な労力を伴う。アプリケーションのバージョンアップには単純なパッケージ価格だけではなく、作業コストも見逃せない。

電子情報資源を維持・保存するには様々な要素を組み合わせる総合的に対応することになるであろうが、電子情報資源を取り扱うアプリケーション群もアーカイブの対象と捉える視点が必要ではないかと考えている。すなわち、電子データの恒久的な利用を保証するものとして、ソフトウェアやハードウェアのリポジトリのイメージである。ただし、これは一大学や一機関、一企業でできることではなく、複数の連携や国のレベルで扱うべき課題である。日本はコンピュータの普及・発展に大きな役割を果たし、その恩恵に与ってきた。その資産を無駄にしないために、保存と活用の仕組みを確立することこそ、今後の学問や経済の発展につながるのだと思う。

Σ Star

<http://iroha.scitech.lib.keio.ac.jp:8080/signa/>

KOARA

<http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/>

2010年に「電子書籍元年」という言葉が話題になって、2年半が経過しています。電子書籍の歴史は意外に古く今回が何度目かの「元年」であることは賢明な皆さんはご承知のことと思います。Harrisonは2000年に、“読書は、コンピュータの前に座ってキーボードにタイプしながらするものではない”⁽¹⁾と述べています。また、“読者は読みたいときにタイムリーにオーダーができ多様な書籍から選べ、低コストで読めることを望んでいる”とも述べています。今回の“元年”はKindleやiPadなどのインターネットの利用を前提とした“デバイス”の登場によって実現した“元年”ともいえると思います。とはいえ、図書館で提供するというのを考えると、まだ障壁が多いとも言わざるをえません。(いくつかの図書館で実証実験が行われ提供されている事実はあります。)実際に日本では図書館向けということ言えば、パソコンでの閲覧がメインになっていると思います。とはいえ、電子書籍が図書館にとって有益な資料群であることには変わりはありません。以下では、海外のサイトでPC上ではありますが無料で使える電子書籍の紹介をしたいと思います。

Open Library(<http://openlibrary.org/>)



海外の電子書籍ですが、100万冊のタイトルを検索できます。世界の古典文学が中心となっていて、青空文庫も検索対象になっています。DAISY形式のファイルもヒットします。検索結果一覧でアイコンが表示され、“Read”のアイコンがあるものはすぐにみることができます。外国語資料の原文への要求があり、古典文学であればつかえるサイトではないかと思います。検索結果一覧では絞り込み機能もあり、言語や年代などからも絞り込みが可能です。原文はinternet archive

(<http://archive.org/index.php>)などのサイトから表示されます。

Intech(<http://www.intechopen.com/>)



医療・科学技術系 (STM) の電子書籍の出版社ですが、2004年から無料で電子書籍の提供をしています。現在、1826の電子書籍と12の電子ジャーナルが提供されています。チャプターごとに表示も可能です。特定の出版社のものですが、所蔵のない分野での資料の提供にはある程度役に立つかと思えます。他にも様々な形で「電子書籍」が提供されはじめています。図書館での活用方法について館種を超えて議論をする必要があるでしょう。

「電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン B-Plus」No. 21 で小特集「デジタルメディアと電子書籍」が組まれています。この特集の解説論文「電子書籍流通と ICT 社会の知の循環基盤」曾根原登・三瓶徹著は現状をまとめていますので興味のある方で未読の方はぜひ読んでみてください。

「デジタルメディアと電子書籍の現状」「国立国会図書館の電子図書館サービス」などの論考も電子書籍の現状を知るうえで参考になると思えます。

[参考文献]

(1) Harrison, Beverly L. E-books and the future of reading. IEEE Computer Graphics and applications. May/June 2000, p32

(2) Open Library <<http://openlibrary.org/>> [2012. 8. 18]

(3) Internet Archive

<<http://archive.org/index.php>> [2012. 8. 18]

(4) Intech

<<http://www.intechopen.com/>> [2012. 8. 18]

(5) 小特集デジタルメディアと電子書籍. 電子情報通信学会誌通信ソサイエティマガジン. P. 6-36

研修会レポート①「指定管理者制度のもとでの図書館運営」

(2月24日実施)

この度の研修は、綾瀬市中央公民館で開催され、公立図書館から20名、専門図書館から3名の方に受講いただきました。講師は、綾瀬市教育委員会生涯学習課の富樫出穂氏と綾瀬市立図書館指定管理者から株式会社有隣堂、綾瀬市立図書館長小林耕平氏にお願いをしました。

研修は三部で構成され、第一部は小林図書館長の案内で綾瀬市立図書館の施設見学を行いました。公開書架から書庫までを2班体制で見学し、各館共通の問題である書庫の満杯状態については、基本的に年間購入冊数は年間廃棄して対応しているとのことでした。

第二部は富樫氏に「指定管理者制度の導入について」、市の方針、導入の経緯をお話いただきました。年間1千万円程度の削減が可能となり、開館日数も50日程増加し、また常勤職員は全て司書有資格者となり、市民サービスの向上が図られた様子を伺うことが出来ました。また司書職として採用された職員の処遇、地元書店との関係等、直面しなければならない課題も指摘されました。

第三部は小林館長に「指定管理者制度のもとでの図書館運営」についてお話しいただきました。

“図書館は人が命。司書が中核となる図書館運営”等興味深い内容のお話でした。図書館の利用者が増え、指定管理者が有隣堂となり本の納品スピードがアップした等、指定管理者側からの成功事例の報告がありました。また、小林館長からは現状の職員の勤務形態や、施設管理、作業内容、また市側との役割分担等実務に関する部分も説明いただき、受講者は熱心にメモを取っていました。

休憩を挟んで、最後に質疑応答の時間がありましたが、受講者の半数あまりの方が質問をし、内容も多岐、細部に渡り、予定時間を越える程皆熱心に講師の方に質問をしていました。特に指定管理者制度を身近な課題として抱えていると思われる図書館の受講者は、研修終了後も講師の方と話しをされ、関心の高さが伺われ、研修会を盛況のうちに終了することができました。講師の方を始め、関係者の皆様、受講者の皆様、お世話になりました。

[小田原市立かもめ図書館 石川 雅明]

研修会レポート②「東京工業大学附属図書館大岡山本館見学」

(3月7日実施)

毎年1回行っている大学図書館見学、今年度は2011年度のグッドデザイン賞を受賞した東京工業大学附属図書館大岡山本館にて開催した。(設計：東工大建築学専攻安田研究室)

図書館は正門から2つ目の建物、東工大を象徴する時計台のある本館とは向き合う形で建てられている。曇り空の中、ちょうど見ごろの梅がありご近所の方々が梅見を楽しんでおられ、大学の自由な雰囲気を感じられた。会議室に集合し、東工大渋谷さんの概要説明を受けた後、2グループに分かれてそれぞれ渋谷さん、小野さんの説明を聞きながら見学コースをまわった。

大変特徴的な外観ながら、図書館部分は地下のみで地上1階にあたる事務室部分は土手に埋められている。そこからみえる地上2・3階の学習スペースはガラス張りの3角形“チーズケーキ”の様相であった。

館内地下1階の閲覧スペースはクの字のテーブルが組み合わさっており、利用者が正面で向き合うことが無いようになっている。無線LAN完備・閲覧テーブルにコンセント口があるなど学生にとって使いやすく、利用しがいのある設備が整っている。吹き抜け周りの明るい場所に閲覧テーブル

を設置し、また、採光が奥へ届くよう低い書架を設置するなど、地下でありながら十分に開放感があり、落ち着いた雰囲気の中長居できる図書館であると感じた。



東工大は外国雑誌センター館機能を担っており、理工系の雑誌は重点的に収集する責任があるとのことだった。国外の会議資料がずらりと並べられた書架は圧巻である。

地上2・3階の学習室は中のグループ研究の壁までガラスでとても明るく、その日の気分で座る場所を変えて楽しめそうだった。

参加者20名全員にグランドオープン記念グッズを配布していただき研修会は終了した。

[東海大学中央図書館 奥原 純子]